

逆境的小児期体験およびアタッチメントによる情報処理プロセスの検討

人文社会科学専攻心理学プログラム
橋本 唯

目的

逆境的小児期体験 (Adverse Childhood Experiences, 以下 ACEs) とは、小児期に経験した精神的または身体的ストレスや体験の総称であり、ACEs は対人関係上の問題や身体疾患、精神疾患を引き起こすリスクを著しく高めることが知られている (e.g., Felitt et al., 1998)。また、ACEs は対人コミュニケーションにおいて重要な役割を果たすと考えられている表情認知の機能にも影響を及ぼすことが指摘されており (e.g., Benarous et al., 2015)、表情が不鮮明な段階から怒りの表情を正確に認識することができたり (Pollak & Sinha, 2002)、恐怖を示す顔を素早く認識できたりすることが示されている (Masten et al., 2008)。

他方、被虐待経験を含む ACEs は、養育者との親密な関係性の中で生じる逆境を多く含むため、不安定なアタッチメントを形成することが示されており (e.g., Cooke, Racine, Plamondon, Tough & Madigan, 2019)、被虐待経験の表情認知の問題においてもアタッチメントの関与が指摘されている (松尾・福井, 2019)。アタッチメントとは、特定の他者との間に形成される情緒的な強い結びつきのことである (Bowlby, 1977)。乳幼児が精神的・肉体的に苦痛のある場面に遭遇した際に、本能的に養育者にしがみつく等の行動が繰り返されるうちに、自己や他者に対する表象として内的作業モデルが形成され、認知、感情、行動的な方略としても機能すると考えられている (Bowlby, 1969/82, 1973, 1980)。そして、青年期以降のアタッチメントは、見捨てられ不安、親密性の回避の2軸から捉えられ、それぞれポジティブかネガティブかによって、安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型に分類される (Bartholomew & Horowitz, 1991; 加藤, 1998/1999)。

しかし、Bowlby を含めた従来の研究においては、内的作業モデルの処理過程の実態にまで踏み込むような研究は数少ない (遠藤, 2010)。例えば、見捨てられ不安が高いほど、怒りや悲しみの表情に敏感であること (Fraleay, Niedenthal, Marks, Brumbaugh & Vicary, 2006)、表情には示されていない情動を誤って検出したり、ニュートラルな表情を否定的に評価したりすることが示されている (金政, 2005)。また、親密性の回避の高い人は、表情に示されていない情動の判断が遅延することが示されており (島・福井・金政・野村・武儀山・鈴木, 2012)、情報処理のプロセスの中でも、表情の読み取りや解釈の部分に関

しては比較的検討されてきた。しかしながら、精神的健康を考えるにあたり重要な問題である感情制御に至るまでのプロセスを解明するためには、まず表情に対する注意の方向づけの解明が必要であるにも関わらず、これまでほとんど実証研究がなされていない。したがって本研究においては、ACEs およびアタッチメントによるネガティブ刺激に対する注意プロセスを明らかにするために、刺激の提示時間を操作して検討する。

方法

実験参加者 大学生・大学院生 82 名 (男性 22 名, 女性 60 名, 平均年齢 20.80 歳 ($SD = 1.87$))。正常な視力を有していること (眼鏡等による矯正は可) を確認した。

質問紙 (1) アタッチメント: Relationship Questionnaire (RQ) の一般他者版を使用した (加藤, 1998/1999)。(2) ACEs: 18 歳以前の 10 種類の体験の有無 (心理的虐待, 身体的虐待, 性的虐待, 心理的ネグレクト, 身体的ネグレクト, 養育者の離婚 (別離), 家庭内暴力 (DV), 家族の依存症, 家族の精神疾患, 家族の収監) の逆境的小児期体験質問票を使用した (米国カリフォルニア外科医臨床諮問委員会作成)。(3) 感情制御: 日本語版感情制御困難性尺度 (J-DERS) (山田・杉江, 2013) と、日本語版感情制御尺度 (EQR-J) (吉津・関口・雨宮, 2013) を使用した。

実験課題 注意バイアスを測定するために、ドット・プローブ課題を用いた (MacLeod, Mathews, & Tata, 1986)。ドット・プローブ課題では、2 つの表情刺激が左右に対提示され、2 つの顔表情刺激のうちいずれかはネガティブ刺激 (悲しみ, 恐怖, 怒り (開口)), もう一方は中立刺激で構成され、刺激は AIST 顔表情データベース (Fujimura & Umemura, 2018) より選出された。練習試行では 12 試行実施し、本試行では提示時間を変えて (250ms, 500ms, 750ms, 1000ms)、それぞれ 192 試行実施した。表情刺激の大きさは全て同じサイズ (400×400pix) に調整されて、24 インチのモニター (解像度 1920×1080) で提示され、画面との距離は 60cm に保たれた。まず、画面中央に注視点 (+) が提示された後表情刺激が対呈示され、いずれかの刺激が提示されていた位置に標的刺激「●」が提示された。ネガティブ刺激と同じ位置に標的刺激が提示された場合には一致条件、反対の位置に標的刺激が提示された場合には不一致条件とした。実験参加者は、標的刺激が提示された位置に合わせて、キーボードのキー「j」「f」を出

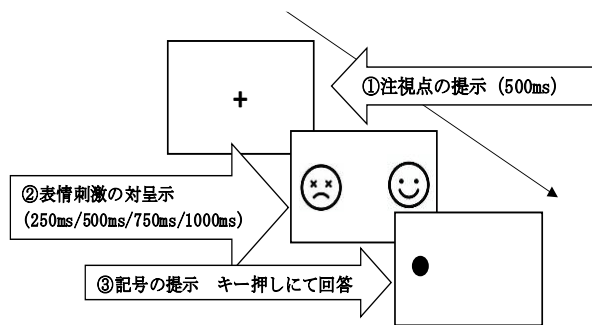


Figure1. ドットプローブ課題の手続き

来るだけ速かつ正確に押すことが求められた。表情刺激の組み合わせや提示時間は、実験参加者ごとに完全にランダムで決められカウンターバランスがとられた。

結果

実験参加者 82 名のうち、安定型は 27 名 (32.9%)、拒絶型 12 名 (14.6%)、とらわれ型 20 名 (24.4%)、恐れ型 23 名 (28.0%) であり、日本の先行研究で得られた割合との間に有意差は見られなかった (例えば、田附, 2015; $\chi^2 = 5.72, df = 3, n.s.$)。ACEs においては、ACEs が 1 点以上ある人 (ACEs あり群) が 41.46%、ACEs が 1 点もない人 (ACEs なし群) が 58.54% であった。

反応時間を分析するにあたって、参加者の誤答を除外し (0.87%)、反応時間が極端なもの (2000ms 以上もしくは 200ms 未満) を異常値とみなして除外した (0.78%)。その後、調査対象者の全条件の平均反応時間から 3SD 以上の値は外れ値として除外した (3.08%)。まず、個人内差を排除して、提示時間 (250ms, 500ms, 750ms, 1000ms) × 一致・不一致 (一致条件, 不一致条件) の 2 要因分散分析を行ったところ、いずれにおいても有意差は見られず、交互作用も見られなかった。次に ACEs (ACEs あり群, ACEs なし群) × 提示時間 (250ms, 500ms, 750ms, 1000ms) × 一致・不一致 (一致条件, 不一致条件) の被験者間 1 要因・被験者内 2 要因の 3 要因混合計画で分析を行った結果、いずれにおいても有意差は見られなかった。単純主効果の検定を行ったところ、提示時間 250ms 条件において有意差が見られ、多重比較 (Bonferroni 法) の結果、ACEs あり群の平均反応時間が ACEs なし群の平均反応時間と比較して有意に長かった ($p < .05$) (Figure2)。

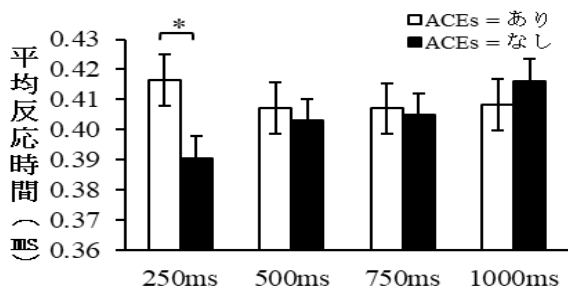


Figure2. 各提示時間 (250ms, 500ms, 750ms, 1000ms) における ACEs あり群, ACEs なし群を比較した平均反応時間 (エラーバーは標準誤差, アスタリスクは有意差 ($*p < .05$))。

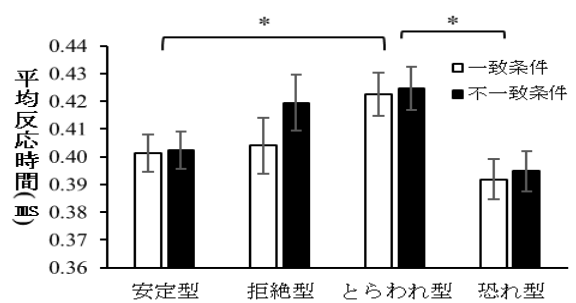


Figure3. 一致・不一致 (一致条件, 不一致条件) における RQ (安定型, 拒絶型, とらわれ型, 恐れ型) の平均反応時間 (エラーバーは標準誤差, アスタリスクは有意差 ($*p < .05$))。

また、RQ (安定型, 拒絶型, とらわれ型, 恐れ型) × 提示時間 (250ms, 500ms, 750ms, 1000ms) × 一致・不一致 (一致条件, 不一致条件) の被験者間 1 要因・被験者内 2 要因の 3 要因混合計画で分析を行った結果、RQ において有意差が見られた。多重比較を行った結果、恐れ型ととらわれ型の間に有意差が見られ、一致条件および不一致条件においてとらわれ型の平均反応時間が恐れ型と比較して有意に長かった ($p < .05$) (Figure3)。

感情制御において、RQ を独立変数として一元配置分散分析を実施したところ有意差が見られ、EQR-J の再評価方略について、安定型がとらわれ型と比較して有意に得点が低く ($p < .01$)、抑制方略について、安定型が恐れ型と比較して有意に得点が低かった ($p < .05$)。また、J-DERS の行動制御困難において、とらわれ型が安定型および恐れ型と比較して有意に得点が高く ($p < .05; p < .01$)、感情受容困難および感情自覚困難において、とらわれ型が安定型と比較して有意に得点が高かった ($p < .05$)。

考察

本研究の結果をまとめると、ACEs のある人は、表情の種類に関係なく顔表情そのものが脅威となり一時的に回避している可能性がある。また、アタッチメントのとらわれ型の人は、他のアタッチメントスタイルの人と比較して表情刺激そのものに注意を向けにくく、Dewitte et al. (2007) が指摘するように、戦略的回避をしている可能性がある。その結果、表情の誤った解釈や読み取りが生じ、自分の置かれた状況を適切に把握したり受容したりすることができず感情制御に困難が生じ、精神的な問題を引き起こすリスクが高まると推測される。ただ、今回は健康な大学生・大学院生に限定されていること、反応時間の個人差を排除しきれていないことから、今後は対象者を広げて検討する必要があると考えられる。

主要参考文献

Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds : I. Aetiology and psychopathology in the light of attachment theory. *The British Journal of Psychiatry*, 130, 201-210.

(主任指導教員：梅村 比丘

副指導教員：杉村 和美・今川 真治・尾形 明子)